

◎第2回大会（1961年）～第19回大会（1979年）

優勝大会は、その長い歴史を通して野球史に名を残した選手も多数輩出した（以下、選手名敬称略）。

初期の大会に出場し、その後長きにわたり顕著な活躍をした選手に、長崎慶一（啓二）、新井鐘律（宏昌）、田尾安志がいる。

いずれも日本のアマ・プロ野球史に名を残した名選手であるが、高校時代以降の活躍については本稿では特に触れず、中学3年生のときの大会記事のみを紹介する。

長崎慶一は、1965年に行われた第5回大会に大阪市立阪南の選手として出場した。報道では、泉南地区の学校の参加も確認でき、参加チーム数は93である。

7月21日小雨のバラつく大阪球場で入場式が行われ、翌日から大阪市内の桜宮、松島、真田山の各球場で大会を行う予定が、長梅雨の影響で26日まで試合を行うめどが立たず、1日5試合に変更されている。当時も中学校の野球部顧問が審判を行っていたので、担当試合のローテーション変更の周知徹底をはかる記事も掲載されている。

さて、阪南は1回戦（対田島）に勝利し、続く2回戦で敗退（0-4 三国）したが、長崎選手の活躍は新聞の戦評に紹介されている。

「初回到3塁打を放つも残塁。試合は完敗であったが、マナーの良い立派な試合態度」と称賛されている。

1967年に行われた第7回大会には、新井鐘律が出場。

第2次組み合わせは現在と同様3回戦勝ち抜き後であるが、ベスト16であり、8月に4回戦と準々決勝を藤井寺球場で3日間かけて、準決勝・決勝は大阪球場で8月6日に行われた。

両球場は、ともに当時のプロ野球団の本拠地である。

特に決勝戦の結果はたいへん詳細で、打者の全打席の結果も分かりやすく掲載されている。

優勝校の大阪市立本庄の四番1塁手「新井」が新井鐘律と思われる。チームは本大会後に出場した近畿大会（奈良市営球場で開催）では準優勝を成し遂げている。

田尾安志は大阪市立西の選手として第8回大会に出場していると思われる。

「ファーストで一番」打者であったらしい（ベースボールマガジン別冊『にっぽんの高校野球 vol.2 大阪編』P34より）。

第8回大会の大阪西の成績は、1回戦は6-0で我孫子に勝利し、2回戦で東三国に0-6で敗れている。2試合とも西のバッテリ、長打を放った打者に「田尾」の名はなく、また、1回戦は戦評の掲載がなく、2回戦の戦評には「田尾」の名は見られない。

この第8回大会の開幕を予告する7月20日（開幕当日）の日刊スポーツ第10面は豪華な内容である。全面を使って、前年の入場式・優勝旗返還の写真（大阪球場）を大きく載せ、「優勝校を探る」と題した記事、第1次組み合わせ表とともに、当時の在阪プロ野球チームの近鉄バファローズのエース鈴木啓示と阪神タイガース・江夏豊の自身の中学生時代を顧みたコメントが掲載されている。

江夏投手はこの年入団2年目で、別の紙面ではオールスター選初出場の記事が載っている。このシーズンの江夏はセ・リーグで401奪三振の現在も残るNPB記録を樹立している。

1970年の第10回大会の報道をみると、泉北地区の中学校の参加が確認できる。

当時は7月末までに8強を決め、その後、8月4・5日に大阪球場で大会の最終盤を行っている。

今日でも大会ごとに配布される資料に歴代大会の優勝校と準優勝校が記録されているが、大会史が10年を過ぎると、大阪市外の学校も上位に進出（近畿大会出場権を得る）するようになったことが分かる。

第11回大会で和泉市立石尾が大阪市外の学校として初優勝を成した。

第17回大会では優勝・堺市立三国丘、準優勝・泉大津市立東陽、第18回大会では優勝・泉大津市立誠風、準優勝・三国丘と2年連続で泉北地区同士で優勝を争っている。

また、翌1979年から全国中学校軟式野球大会（全中）が始まった。

大阪市外の地区からの参加と上位進出が目立つようになった優勝大会の歴史の流れの中で、三島地区の中学校も段階的に準硬式から軟式へと移行を始め、大会に参加を始める。